

2026 年 1 月 25 日 降誕節第 5 主日礼拝メッセージ

「言葉・言霊・事ことば」

牛田匡牧師

聖書 申命記 30 章 11-20 節

先週から寒波の影響で、一段と寒い日々が続いています。日本海側では大雪が続いているとのことですし、これ以上の災害や事故に結びつかないことを祈るばかりです。そのような真冬の時期にもかかわらず、突如、衆議院が解散されて選挙が行われることになりました。雪の降り積もる中、本当に大切なもの、「人々の命と安全を守る」ということが、為政者たちの目には映っていない、見えていないということでしょうか。

その他、この時期は受験シーズンということもあり、毎年恒例のことですが、スーパーへ行っても、お菓子のパッケージなど、様々な所に受験に向けて、合格祈願のような「験担ぎ」の語呂合わせをたくさん目にするようになりました。試験に「受かる」とか、勝負に「勝つ」というような、縁起の良い言葉を食べたり、身に着けたり、それらの言葉に囲まれることで、その言葉通りの効果が期待できるというだと思います。実際には、そのような行動をした場合と、しなかった場合とで、結果としてどのような違いがあったかどうか、効果があったかどうかなどの成果は確かではありませんが、安心感などの気持ちの上では確かに効果はありそうです。

そのような「験担ぎ」の背景にあるのは、人の口から発せられた言葉が、意志を持った言霊として、勝手に行動して、相手に対して良いことや悪いことを働きかけるというような「言霊」という考え方です。言葉は人の口から発せられるものであるけれども、それだけではない。人の力や責任を越えたものとも結びついていて、人を活かすこともあれば、人を殺すこともある。だからこそ、言葉を粗雑に扱ってはならないし、畏怖の念をもって、祈りや賛美などの宗教的な儀式でも、多く用いられてきているのだと思います。そしてそのようなことは日本や東洋だけではなく、広く世界各地で見られていることであり、言語によるコミュニケーションを進化させた人類に共通してみられる感覚なのかもしれません。

今回の聖書の言葉は、ヘブライ語聖書の「申命記」の中から、命の神ヤハウェが

モーセの口を通して、古代イスラエルの民に対して語り伝えた契約、律法、戒め、教えの言葉でした。「申命記」にはたくさんの律法、教えが記されていますが、30章11節にある「私が今日命じるこの戒めは、あなたにとって難しいものではなく、遠いものでもない」とは、30章に至るまでに連綿と語られた数々の戒めや教えなど、それら全てをまとめて述べている言葉だと理解することができます。とはいえ、律法には様々なことが事細かく定められていますから、それらを全て守ろうとすると、とても難しく困ってしまいます。それこそ、現代でも法律は山ほどあって弁護士などの専門家でなければ、分からないことがたくさんあるのと同じでしょう。

しかし、神は「私が今日命じるこの戒めは、あなたにとって難しいものではなく、遠いものでもない」(11)と言われました。この「難しいものではない」というヘブライ語は、「不可能なものではない」「できないものではない」とも翻訳できる言葉です。12節以降も分かりやすく、「それらは遠くにあるものではなく、すぐ近くにあるから、知らないわけでもないし、できないわけでもない」と述べられています。14節の「あなたの口に、あなたの心にある」という言葉も、「神の言葉を絶えず聞き、いつでも口ずさんで心に覚えていなさい」というような文字通りの意味ではなく、むしろ「神の心は自分自身の心の中にある。良心として一人一人の中に与えられ、備わっている。だからこそ、私たちは神の言葉に従って生きていくことができる」ということなのではないかと思います。言い換えるならば、「それは遠くにあるものでもなく、誰かから教えてもらわないと理解できないものでもなく、それぞれの人が自分自身の中に持っているものである。だからこそ、決して不可能ではないのだ」ということでしょう。

後半の15節以降は、「命と死」「祝福と呪い」という対照的な2つのものが、目の前に並べられて、「右か左かどちらかを選びなさい」と脅迫的に迫られているように感じられるかもしれません。もしもそうだとすると、それこそ何かの罰ゲームのような、神という逆らうことのできない絶対的存在から、人間に対して一方的に下されるモラルハラスメントのような状況になってしまいますが、よく見ると、このお話はそうではありません。右と左、どちらを選んでも嫌なもの、避けたいもの、やりたくないものではなく、あくまでも「命と死」「祝福と呪い」という「良いものと悪いもの」

の2つであって、その上で「あなたは命を選びなさい」(19)、「良いものを選びなさい」と勧められています。悪いものである「死と呪い」ではなく、「命と祝福」を「選ばないはずがない」、あなたは「命と祝福」を選ぶことができると言った方が適切でしょうか。命の神ご自身が「私があなたと共にいて、命への道を共に歩まないはずがない」と言われているのだと思います。

さて、今日は「言葉」と「言霊」と、もう一つ「事ことば」という耳慣れない言葉も紹介しました。この言葉はカトリックの押田成人(おしだ・しげと)神父が考えられた表現で、言葉の背後にある「事柄、神の働き」に注目した表現です。そもそも「言葉」という語は、新約聖書が書かれたギリシア語では「ロゴス」と言いますが、ヘブライ語聖書が書かれているヘブライ語では「ダーバール」と言います。ギリシア語の「ロゴス」には、「論理」などの意味もありますが、イエス様もまたその周りにいたガリラヤの田舎の無学な庶民、農民漁民たちにとっては、学校で勉強した知識はありませんでしたし、日常生活で使っていた言語は、ギリシア語ではなくヘブライ語に近いアラム語でした。そしてアラム語・ヘブライ語における「ダーバール」は、「言葉」という意味だけではなく、「出来事そのもの」を表す語でもありましたので、イエス様たちの言語感覚としては、「神の言葉」とは、耳で聞いたり、文字で書かれていたりするものではなく、むしろ「神が共に働かれた出来事」そのものだと受け止められていたのだらうと思います。

ここ1年2年の間に、生成AIが飛躍的に進歩して、まるで人間と対話しているかのように、どんどん対話をするようになってきています。その膨大な知識の量と、迅速な計算速度には、人間はどうやっても勝つことはできませんが、AIが語る言葉と、人間が語る言葉の決定的な違いは、その言葉に込められている重み、重さではないかと思います。それこそAIは黙っていたら、ただ計算を停止しているだけですが、人間同士は沈黙を通して、時に意志を通わせることがあります。そのように、その人の経験、生き様に裏打ちされたものこそが積み重なって、「重み」となり、「事ことば」として表現されるものになっていくのではないのでしょうか。

生成AIの進化だけではなく、ここ数年、毎年のように交通ルールも、ますます細かく、また厳しくなっています。その背景には新しい乗り物の普及や、携帯す

る持ち物の変化などがあり、それらに合わせて、事故が起きないようにルールを変化させているためです。しかし、法律はどんどん変わっていくのに、現場で生活している人たちは、法律が変わったことを知らないまま、これまで通りに生活しているということも、よくあることです。それでも、日常生活に支障が出ていないのだとすると、それは大切なのは細かい交通ルールを全部知っているということよりも、自分と周りの人たちの安全に配慮して通行するという大原則、目指すところを間違えていないからに他ならないのだと思います。

同じように、神の言葉も「たくさん覚えているから優れている」のではなく、自分事として、実際に身をもって生きてみるということこそが大切なのではないのでしょうか。それこそが「事ことば」「出来事」としての神の言葉なのだろうと思います。聖書にはたくさんの教えが記されており、それこそAIやロボットでなければ覚えきれない分量ですが、本当に大切なものは極々身近にある、私たちの心の中にある簡単なものであり、それはイエス様がその身をもって示してくれたように、「私がやったように、あなたたちもやってごらんなさい。きっとできるから」と言ってくださっているように、「隣の人を大切にする」ということ、それただ一つなのだと思います。私たちは今日も命の神と共に、ここから互いの命を生かし合う道を選び、歩み出して参ります。